

[書 評]

金敬黙 (キム・ギョムク)、Markus Bell,
Susan Manadue-Chun 共著 『日英対訳・
バイリンガル平和教育教材 A North Korean
Refugee in Japan: Hana's Stories
私、北朝鮮から来ました：ハナのストーリー』、
アジアプレス・インターナショナル出版部、
2016年。129頁、1,270円＋税。

奥村みさ

本書は「地球市民学校」という架空の多民族・多文化的背景から構成される学校を舞台に、北朝鮮からの脱北者である少女リ・ハナを主人公に据え、エスニシティと多民族・多文化社会化する教室での異文化理解・多文化教育について考えさせる読み物であり、かつワークブックである。2016年8月5日に文科省より発表された次期学習指導要綱では、日本史A・Bの「歴史総合」への再編が提案された。そして、日本の社会科教育ではますます「世界の中の日本」を意識した教育内容が重視される傾向が強まってきた。大学においても教職必修科目である「異文化理解」、「世界の中の日本」ではより具体的で実践的な教育が必要となつてこよう。

日本国内での多文化化は近年急速に進み、外国からの観光客数の増加は言うまでもなく、異文化的背景を持つ国民や外国籍の隣人も増加してきた。この原稿を執筆している2016年夏はリオデジャネイロで夏季オリンピックが開催されているが、すでに日本代表として活躍する選手たちのなかにはダブルのエスニック文化を背景にもつ選手も少なくない。2015年度ミ

ス・ユニバース日本代表はアフリカ系アメリカ人の父親と日本人の母親を持ち、日本社会の多民族化の象徴としてアメリカ・メディアの取材も受けた。

多民族・多文化的背景を持つ子供たちが増加するなか、かれらをどのようにして教室に、ホームルームに受け入れるのか。そのような教育の現場に立とうとする学生たちへの講義のカリキュラムの組み立て方、また適切な教材を作成することが求められている。本書はそのような講義の教材として最適な教材のひとつとなろう。

本書の最も大きな特徴は英語と日本語とのバイリンガルで構成されていることである。最初に英語、次に日本語で編集されているので、英語学習の教科書としても使用できよう。特に学生たちの間で交わされる英会話には、同年代の学生たちには今すぐ使用できる身近で実用的な語彙やフレーズが満載である。

以下、目次をたどりながら、本書の構成を紹介する。本書はまず、リ・ハナが転校生として地球市民学校に到着するエピソードから始まり、一話簡潔で16のエピソードから構成されている。同級生には日本人の卓也と韓国出身の留学生のジュンホとチョルの他に、コリア系日本人の由美、朝鮮学校に通うヒョンミ、在日コリアン3世のインホ、北アイルランドのカトリック家庭に生まれイギリスとカナダの二重国籍のアーロン、ジャパニーズ・アメリカンとコリアン・アメリカンの両親を持つマリコ（ティナ）といった、多彩で複雑な文化的背景を持つ生徒が同じ教室で、英語で学んでいる、という想定である。

日韓両国で異なる歴史観の問題、ヘイト・クライム、捕鯨やイルカ漁に関する問題など、異文化理解を考える上で頻繁に取り上げられる問題から、南北コリアの統一は必要か、韓国人とコリアンはどこが違うのか、といった、かなり突っ込んだ議論も果敢に取り上げている。本書では著者たちの価値観はあえて提示せず中立的な立場から、学生たちに主体的にこれらの

問題を考えさせるワークブックとなっている。よく練られた問題の選定・構成は、おそらく著者の一人である金敬黙氏が大学の共通科目としての「平和論」を毎年合計約 1000 名近くの学生を 10 年以上に渡り、教えてきた実績の賜物と考える。

ストーリー・テリングとして秀逸なのは、エスニック・アイデンティティの問題を軽いミステリー仕立てで取り上げていることであろう。ハナは実は転校してきた当初、自分が北朝鮮出身であることを秘密にしておいてほしい、韓国出身ということにしておいてほしい、と担任の先生に懇願する。ところが、それを秘密にしていたことから、様々な場面で答えに窮する困った立場におかれることになる。担任の先生もうっかり秘密をもらしそうになって、ハナが慌てる場面も。読者はいつハナの秘密がばれるか、ハラハラドキドキしながらコリアンは一枚岩のエスニシティではないこと、そしてそれがいかに重要で微妙な問題か、ということを理解するのである。最終回はハナが自分は北朝鮮出身であることを自らのアイデンティティとして受容し、カミングアウトする場面で終わる。

本書をより魅力的にしているのは、学生生活の生き生きとした細かな描写である。スマホを駆使してフェースブックを検索したり、セブンティーン誌をみんなで読んだり、という学校生活の描写のディテールが、読者である学生たちにあたかも自分たちも地球市民学校の学生であるような臨場感を醸し出している。

ただ惜しむらくは、主人公のリ・ハナの非常に複雑なアイデンティティのジレンマ（北朝鮮出身なのに韓国出身を装い、この学校では友人たちと英語で会話していて、コリアン同士で話すときには訛りを気にする、など）に対して、一般読者として想定される日本人学生たち（多くの場合、両親とも日本人で高校卒業まで同じ地域で育ち、学校では友人たちと日本語で会話している）が問題の重要性を頭で理解しながらも、どれだけ主人公のハナに感情移入できるか、ハナのジレンマを自分たちの問題として同定で

きるかは、かなり難しいと想像する。ゆえに、本書を読み物として副読本として学生に読ませるには良いが、教室で実際にワークショップの教材として使いこなせるかは、講義を担当する教員の力量、つまり教員自身がどれだけ脱北者やコリアンのエスニシティについて基礎知識があるか、自身が育った文化を相対化できるか、異文化に対して寛容で柔軟に対応できるかにかかってくるように思える。その意味では、重要な用語には章末か初出のページ下に簡単な説明があると良かったかもしれない。

移民としての脱北者のアイデンティティ、また移住先での受け入れに伴う諸問題は看過できない重要な問題である。また本書は使い方によってはコリアンのアイデンティティ問題から敷衍して、社会的マイノリティがいかに自分自身のアイデンティティをカミング・アウトするか、という問題、たとえばLGBTの問題などにも議論を広げていくことができよう。

この本を教科書として大学の講義において実際にワークショップ形式で使用する場合を想定すると、もう少し一般読者（学生）の生活に身近な状況を想定したケース・スタディ、たとえば日系ブラジル人、フィリピン人、あるいは華人系のオールド・カマーなど、日本におけるエスニック・マイノリティでも比較的人口の多い文化的背景を持つ若者を主人公に据えた続編などがあると、教科書としてより広く使用されやすいように思う。著者たちの問題意識の高さ、そしてストーリー・テラーとしての日本語と英語の文章力を鑑みると、ぜひ続編、あるいはシリーズ化などを期待したくなってしまふのは評者だけではあるまい。

本書は主人公ハナと同年代の若者たち、教員、そして教員養成や文化交流に関わる多くの人々に読まれ、読者一人一人が今後の日本社会の多文化化のゆくえを考えるひとつのきっかけとなってほしい本である。

以上